

値遇頂戴。万相莊嚴金剛界心。大勇猛幢智

慧藏心。如那羅延堅固幢心。如衆生海不可

尽心。生生世世皆悉具足」(日本大藏經四十二

三時三寶札積、一頁)とあり、長い文句の三寶札は私自

身のものであつて諸君には勧めないと述べておられ、又

在家の男子女人は「南無三寶後生タスケサセ給へ」(日

本大藏經四十二、三時三寶札、十四頁)と唱へてもよい

と云い、三寶札は易行易修である事を説いておられる。

在家の人々に菩提心信仰を簡単に実践出来る様に努力さ

れた点がかがわれる、又浄土門の信仰と衝突するもの

でない事細かく述べておられる。この様な事で高弁は源

空の信仰に対して一方破邪を加へられたが一方その受け

る影響の大きかつた点がかがわれる。高弁は華嚴を祖

述し、その信仰を以て宗教に対する中心思想とし一面真

言密教に回想を試み、他面禪への憧憬を一層深く研究さ

れ、又信仰の実体として禪の三昧、浄土門の信心等に対

しては高弁は觀法を持いられ、高弁の教学の大成された

時代は一般の墮落と共に仏教教団の混乱期でもあり真実

の教を求めめるためには混乱期であり真実の教を自己の内

觀に求めて解脱に苦心されており高弁の生涯の教学は体
験に根拠を有しており伝統的正統主義であるけれども深
き体験に立ち高弁独自の新しい教学信仰を組織すること
に努力された僧侶であつた。

道元禪師と親鸞上人の 信についての考察

一 加藤敏明

道元禪師の仏法は要約すれば、信即証、信即仏という
ことが出来得るであろう。「正法眼藏菩提分法卷」に五
根の才一の信根を示して

信根はしるべし自己にあらず、陀已にあらず、自己

の強為にあらず、自己の結構にあらず、他の牽挽にあ

らず、自己の規矩にあらざるゆえに、東西密相付なり、

といつてゐる。一般教学において信根は、仏法僧の三寶

や、四諦を信することゝされている。その根といわれる

所以は、信、精進、念、定、慧の力によつて諸々の善法

を生ずる根本とみられるからである。道元禪師において

は、この一般教学上の理解を基盤として、さらにそれを

止揚された感がある。それは何故であろうか。その意味

する信こそは、仏祖正伝、東西密付の大仙心を以つて信

となすからである。更に道元禪師は「菩提分法巻」に

渾身以身を信と称するなり、かならず仏果位と隨陀

去し、隨自去す、仏果位にあらざれば、信現成あらず、

このゆえにいわく、仏法大海、信為能入なり、おほよ

そ信現成のところは、仏祖現成のところなり、

という。東西密付の信は、単なる觀念的のものではなく、

渾身心に現成する信であり、全身心を貫いているのであ

る。こゝにおいて面授を尊ぶ所以も理解される。何故な

らば、仏果位にあらざれば信現成にあらずであつて、仏

果位とは信に依つて仏性が仏性として現成したものであ

り、仏性は釈尊の成正覚によるものであるからと解され

る。すなわち信即仏果位、仏果位即信である。従つて信

は、仏果位に到るための入場券の如きものではなくして、

信は仏果位を仏果位たらしめる生命そのものである。故

に信現成のところは仏祖現成のところなりといわれるの

である。

二

前述の如く、道元禪師の信現成のところは仏祖現成の

ところといわれることは、親鸞聖人の信にも相通するも

のを する。すなわち親鸞聖人の宗教について略説す

るならば、彌陀救済の對機は一切群生であり、凡夫であ

り、さらには悪人である。かゝる悪人を救うに足る如来

の救済力は、それに比例して絶大なものがなければなら

ない。こゝに如来の他力廻向を迎感する基因がある。如

来の他力廻向が衆生に如何ように具現されるか、如来の

衆生救済の摂取様式こそは、衆生における信にほかなら

ない。如来の衆生救済は本願の三心上に顯現され、それ

が衆生に徹透しては機受の一心となると解される。才十

八願の三心はそのまゝ成就文の聞信一念となし得る。い

うまでもなく聞信一念は、疑いなく信樂する一心である。

無疑信樂の一心こそ、親 聖人の宗教の核心でもある。

しかもこの信とても、衆生の發起するものではなく、そ

の深い内感においては如来廻向の信であるとされる。故

に親 聖人の信は、衆生から仏への信ではなく、如来廻

向の信であり、仏一元の信であつて、こゝのところを親聖人は、信心よろこぶその人を如來とひとしと説きたまふといわれるのである。そして更に「涅槃經」によつて、大信心は仏性なり仏性即ち如來なりと信と如來と等しきことを明らかにされている。こゝにおいて、道元禪師の信現成のところは仏祖現成のところなりといわれるのと全く同一義趣を感ずるのである。

三

斯様に上述の如く考察してくれば、道元禪師の仏法はいわゆる自力の一方に偏する如くみられ、親鸞聖人の他力の法門とは全くあい容れざるものゝ如く考えられているのであるがそれは凡そ誤解に基くものであつて、兩教共に信を基調として偉大なる積尊の諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の「三法印」を宣説するものにほかならないと解する。

しかも尚注目すべきことは、道元禪師も親鸞聖人も共に、最初は聖道の学を修し乍ら、全く同調の境に到つた転機は、それぞれの師に相遇されたことに起因するものと考えられる。すなわち道元禪師は如淨禪師に、又親鸞

聖人は法然上人に会われたことによるであらう。従つて「教行信証卷第六」に

愚禿積鸞建仁辛酉曆。棄雜行分歸本願

と示されていることは、道元禪師が「面授」に、

道元大宋宝慶元年乙酉五月一日、はじめて先師天童古仏を禮拜面授す、やゝ堂奥を聽許せらる、わずかに身心を脱落するに、面授を保任することありて、日本に本来せり

と示されたのと彼此合一の面授の告白である。更に元久二年「選択集」を与えられるとき、題目及び題下の十四字を法然上人自ら書して、親鸞聖人に伝えられたということは、禪門における嗣書の形式と相似たものがある。而うして、道元禪師と親鸞聖人の仏法は信をその中核とするものであると共に、斯様にそれぞれの宗教の特色を最も端的に具現するに到つた動機とされるところの師との人格的融合ということも閑却に付されない事実であり得るであらう。